農工大の樹木　その37

〈解　説〉

アセビ

（ツツジ科アセビ属の種，学名：*Pieris japonica* D.Don、漢字：馬酔木、別名：アセボ、アケモ、アセモ）

この種は樹高４m以下で、光沢のある厚い葉を持つ常緑低木です。分布は本州（山形、宮城県以南）、四国、九州にあり、琉球や台湾にもこの変種が見られ、中国には近縁の種があります。二次林の広がる里山のやや乾燥立地に普通に見られ、３月中旬から５月はじめに、枝先にスズランの花を思わせる可憐な白い花を房状に咲かせます。この種の美しさは江戸の昔から注目され、多くの品種が作られて庭を飾ってきました。現在は公園にも多く見られます。この種は有毒で、昔は葉を煎じて殺虫に用いたそうです。この種名（和名）である「アセビ」は馬がこの葉を食べると酔って足がなえるので足廃（アシジヒ）の訛ったもの、あるいは、アシミ（悪し実）の音便だという説があります。またこの種を呼ぶ漢字に「馬酔木」を充てたのも、この木の葉を食べると馬が苦しむことに拠っています。動物はこの種が有毒であることを知っているようです。その証拠に九州の久住高原内の管理が良くない場所には、放牧された牛が食べ残したために、この種の優占群落が見られます。また、奈良公園にこの種が多いのは鹿が食べないためと言われ、奈良ではこの種をシシ（鹿）クワズと言うそうです。でも、時には間違って食べて腹痛を起こすそうです。それを防ぐために中国山地の人々は、放牧地に発生したこの木を一本、一本、手で抜きとって駆除していたそうです。

この写真は、小金井キャンパスの正門の右側に植えられているものです。一度、観察してみてはいかがでしょうか。

（農学部教授　福　嶋　　司）